

平成27年度 海外臨床薬学研修報告書

研修期間：平成28年2月28日～平成28年3月13日

研修先：アリゾナ大学薬学部

薬学部 薬学科 5年 110973411 打矢貴子

私は5年時に病院及び薬局実習を行い、5か月間、現場で働く薬剤師の姿をみてきた。薬剤師は病気に対して不安を持っている患者さんには、側について不安を聞いてあげたり、薬の効果がきちんと出ているのか、副作用が出ていないかを診てあげたりして、患者さん一人一人と真摯に向き合っていた。そして、薬剤師は薬の投与量の適切性、相互作用などを確認し、必要であれば医師に疑義紹介を行っていた。しかし、患者さんへの薬の選択に薬剤師が積極的に関わっているという姿を見る機会はあまりなかった。そこで、アメリカの薬学生はどういう授業を受けているのか、また日本とは異なる薬学教育を受けて働いている薬剤師はどういう形で患者さんと関わっているのかということを見て、日本の薬剤師の長所と短所を知りたいと思い、このアリゾナ大学海外臨床薬学研修に参加することを決めた。

そして、平成28年2月28日から3月13日までアリゾナ大学にて、海外臨床薬学研修に参加した。アリゾナ大学では、大学の先生方によるマンツーマン講義、授業への参加、病院見学、レジデント生に付き添っての病棟見学、薬局見学、薬学生との交流を行った。

この研修での一番の驚きは名城大学とアリゾナ大学の授業内容は大きく変わるものではないという点である。両大学とも薬物動態などの講義形式の授業と薬物治療学などのグループディスカッション形式の授業を行っており、授業内容は全く異なるということではなかった。しかし、両大学の授業内容に対する大きな違いは診断学を学んでいるかどうかである。名城大学の薬物治療学の授業では、疾患が診断されている上で、学生どうしのSGDを行い、その疾患のgradeを判断したり、薬を選択したりしている。しかし、アリゾナ大学の授業では、面談を行って患者さんから情報を聞き出したり、フィジカルアセスメントを行ったりすることで診断を行い、そこからガイドラインに従って薬及び投与量を決定していく。名城大学のフィジカルアセスメントは血圧、脈及び心音などを聞くのみであるのに対して、アリゾナ大学では皮膚、髪の毛の状態を観察したり、肝臓及び脾臓などの大きさを確かめたりして、患者さんの状態を客観的に観察し、医師と同じように診断できる練習を行っている。しかし、現場で薬剤師がフィジカルアセスメントを行うことはない。フィジカルアセスメントを学ぶ目的は、薬剤師となったときに、患者さんの病気を診断するためではなく、医師がどのように診断しているのかということを理解するためである。このように学生時代から、医師が行う診断方法を学ぶことで、医師の患者さんに対する考え方を理解することができるため、薬剤師として働く際に医師と大きな隔たりなく接することができるのである。

また、アメリカでは、プレファーマシー制度を取り入れている。プレファーマシー制度とは、薬学部ではない学部で2年もしくは4年学んでからさらに薬学部を受験するのである。他学部を一度卒業していることから視野が広い学生が多く、入学試験には筆記だけではなく、面接も含まれており、勉学ができてコミュニケーション能力が低い学生は薬学部に進学できないため、コミュニケーション能力の高い学生が多いのである。一方、日本の薬学生は高校を卒業した後すぐに薬学部に入学することができ、入学試験に面接が必ず

あるわけではないため、コミュニケーション能力が低く、自分の意見を伝えられなかったり、人の話を聞くことができなかつたりする傾向があるように感じる。しかし、薬剤師として社会に出た時、多くの薬の知識を持っていても、コミュニケーション能力がないと、説明を行っても患者さんや他の医療従事者に理解してもらえなかつたり、患者さんから聞き出すことができる情報量が少なくなってしまうたりする。そのため、日本の薬学生はアルバイトや部活などで活発に行動し、様々な人と触れ合うことで視野を広げ、コミュニケーション能力を高める必要があるのである。そうすることにより、薬剤師となったときにその能力を活かして様々な人と会話をし、薬剤師としての信頼を得ていけるようになるのである。そして、私はあまりコミュニケーション能力が高い方ではなく、その努力をすることは今からでも遅くはないと思ったので、今後、多くの人と関わり少しずつ高めていきたいと思った。

さらに、アリゾナ大学の薬学生や病院で働いているレジデント生と2週間接して思ったことは、学んでいることを心から楽しんでいることである。先に述べたように、アメリカにはプレファーマシー制度があるため、薬学部を受験しなくても大卒が得られるにも関わらず、この道を選ぶということは、薬剤師になりたいという明確な意志があるのである。そのため、日本とは異なり、授業中に寝ている学生は誰一人としておらず、手を上げて積極的に質問している学生が多かった。また、病院業務を教えて頂いたレジデント生も毎日の業務を淡々とこなしているのではなく、日々、薬について学んでいることを楽しんでいた。これは、アリゾナ大学の授業及び病院見学を行って感じた生徒やレジデント生の積極性の高さにも繋がることである。本気で薬学を勉強したい、患者さんを助けたいというぶれない気持ちを持っているからこそ、学ぶことが楽しく積極的に物事を吸収したいと思うのである。この意識と積極性の高さに感化され、私も薬学部に入学した理由、今度どういう薬剤師になりたいのかという理由を忘れないで、今後も勉強して自分を高めていきたいと思った。

今までアメリカの薬学生・レジデント生の長所をみてきたが、短所としては、アメリカの薬剤師及びレジデント生は日本の薬剤師とは異なり、患者さんに寄り添う時間や患者さん一人一人に合わせた調剤は少ないということである。病院では、レジデント生は医師と共に回診し、薬・投与量の提案などを行い、薬剤師としての職域を発揮していたが、日本の病院のように薬剤師が患者さんの病気や薬に対する不安を聞いたり、何か困っていることがないか親身になって寄り添ったりという光景はなかった。さらに、見学した薬局では、1日あたり500枚もの処方せんを薬剤師1人ですべてこなす必要がある。調剤助手（テクニシャン）の支えがあっても、1人で患者数500人分もの監査、疑義紹介、服薬指導を行うことは容易ではない。そのため、服薬指導は患者さんから質問されたときか、薬剤師が面談する必要があると思う患者さんとしかしないとのことである。そのため、薬、副作用の説明、コンプライアンスの確認などは時間がないためほぼできず、一度も顔を見ることなく終わってしまう患者さんもいるとのことである。また、アメリカではボトル調剤が主

流であるため、一包化や粉碎調剤はほとんど行われていない。そのため、飲み忘れの多い患者さんや手のふるえによりヒートから錠剤を取り出すことが難しい患者さんには一包化を行ったり、飲み込む力が弱い患者さんには粉碎調剤を行ったりなど、状態や性格に合わせた調剤を行うことはほとんどないとのことである。私は、薬剤師は病気を改善するための薬物療法の決定を行うことも重要な職務の一つであると思うが、患者さんの性格や状態に合わせた薬や服用方法を提案し、薬の効果や副作用を確認し、病気や薬に対して聞きたいこと、不安に思っていることなどを聞くことも薬剤師の重要な職務であり、その点において優れているのは日本の薬剤師である。海外臨床薬学研修に行って、患者さんと触れ合う時間が少ない薬剤師の姿をみて寂しく思い、私が薬剤師となって働くときには患者さんに寄り添い、気遣いができる薬剤師になりたいと改めて思った。

アリゾナ大学への海外臨床薬学研修を通して感じたことは、日本とアメリカの薬剤師は思っている程、大きく異なるわけではないということである。今回の研修に参加する前、アメリカの医療は日本の医療の30年後であるという話を聞いていたため、両国の医療にどれほどの差があるのだろうかと不安に思っていた。確かに、アメリカの薬剤師は日本の薬剤師よりも積極性及びコミュニケーション能力があり、医師からの信頼も高く、病院及び薬局で患者さんに適切な薬物治療を選択する機会はアメリカの方が多かった。しかし、薬剤師が持っている薬の知識の量は両国で大きな差はなく、むしろ、患者さんに寄り添うという気持ちは日本の薬剤師の方が強いと感じた。では、両国の薬剤師への信頼性の差はどこから産まれたのかと考えると、薬剤師のコミュニケーション能力の高さと視野の広さ、そして積極性だと私は思う。この3点の能力に関してはアメリカの薬学生の方が日本よりも高く、見習うべき点である。しかし、日本の薬学生・薬剤師がこれらの点の低さに気づき、時間がかかっても少しずつ改善していくことができたなら、薬剤師への患者さんや他の医療従事者からの信頼を獲得することができ、今まで以上に薬物治療に積極的に参加することができるようになると思った。私は、海外臨床薬学研修に参加し、アメリカの薬学生、レジデント生と長い時間関わることにより、日本の薬学生、薬剤師の長所と短所を見つけることができた。さらに、私に足りない能力とこれからもっと伸ばしていくべき能力を発見することができた。このような貴重な経験をさせて頂いたことに感謝をし、ここで得たことをきちんと心に刻み、今後の人生に活かしていきたいと思う。